

派遣ロータリークラブ：2670 地区 阿南
受入ロータリークラブ：1060 地区 レディッチ キングフィッシャー
学習機関：バーミンガム大学

平成 25 年 6 月 4 日
国際親善奨学生 杉浦 藤一郎

5 月は主に修士論文への準備と、リーダー育成およびコンサルティングのためのトレーニングに参加しました。トレーニング終了後には必ずレビューを行います。レビューにおいては、チームメンバー各々より、良かった点や悪かった点、次に改善すべき点などを共有し、次の課題に活かそうと試みます。そのような取り組みにより、知識の定着を図るだけでなく、トレーニングの成果を最大限に活用するという意識が非常に高いことに驚かされました。

また、修士論文について内容や取り組む方法などについての事例や、過去の修士論文等の紹介が行われました。また、大学が世界中の様々な調査機関と提携しており、特にマーケット情報や企業情報、また他大学から発表された論文などのデータベースへのアクセスが提供されています。多大な図書館の蔵書数に加え、データベースから世界中の最新の情報を入手することができ、効果的な論文作成のために最大限のサポートを提供していただいていると感じます。

また、今年のイギリスは少し異常気象とのことで、5 月に入ってもまだまだ寒い日が続きました。寒い日には 0℃ 近くまで気温が下がることもあり、雹が何回か降りました。一方、サマータイムの効果もあって日没は非常に遅く、午後 10 時くらいになってやっと日が陰り始めます。

さて、5 月に参加したイベントについてご報告いたします。

まずは大学のイベントで、上記にも述べましたリーダーシップ育成トレーニングおよびコンサルティングトレーニングに参加しました。また、ロータリーにおいては、一つのクラブを訪問しスピーチを行いました。さらに、奨学金コーディネーターであるポール様ご夫妻と、5 月 31 日～6 月 3 日の三泊四日の日程で、ウェールズ北部へと小旅行に行きまして参りました。

<リーダーシップ育成トレーニング>

大学からバスで一時間ほど離れたところにある「マルベーン アウトドアセンター」というところで、二泊三日の合宿形式でリーダーシップ育成トレーニングを行いました。その施設は大学や企業からのトレーニングを受け入れており、宿泊施設や食堂も兼ね備えた大きな研修所です。様々な屋外活動を提供できるように準備されており、コースの内容によっては小学生ぐらいからでも参加できるように設計されているとのことでした。宿泊所は5人～10人ほどの相部屋で共同のトイレとシャワー、食事は施設の方で準備していただけます。牟岐にある少年自然の家と似たような施設で、アクティビティの内容を大人向けにアレンジしたような施設でした。研修施設は街中から離れた山の中にあり、インターネットはもちろんのこと携帯の電波さえつながらない環境でした。そのおかげで全員が研修に集中することができ、より有意義な時間を過ごすことができました。

研修について、初日の午後および夜、二日目の午前・午後および夜、三日目の午前と、全部で6種類の活動を行いました。8人～10人程度のグループに分かれ、6種類全てのアクティビティでアクティビティリーダーおよびオブザーバーを決定します。リーダーとオブザーバー以外は、チームメンバーとして活動に参加します。オブザーバーは活動には参加せず、リーダーとメンバーの動きや取り組み等を外から観察し、レビュー時に全体に報告します。また、それとは別にグループ全体のリーダーを決定し、グループ全体を統括します。グループリーダーはアクティビティにはメンバーとして参加し、活動中はアクティビティリーダーが指揮をとりまします。私はグループリーダーとして参加したため、各アクティビティを指揮する役目を担うことができませんでした。そのかわり、自分のグループ全体を見渡すと共に、他のグループリーダーとも情報を共有することができ、非常に有意義な役割を全うすることができたと感じています。

行ったアクティビティについて、一番シンプルなもの壁のぼりや綱渡りなど、複雑なものでは実際の森の中に入って簡易な地図を頼りに宝探しなど、多岐に渡っていました。どのアクティビティもチームワークを必要とし、無計画のまま実行すると途中で行き詰まってしまうため、リーダーがしっかりリーダーシップを発揮し、メンバーを適切に指導することが大切になります。また、壁のぼりなど高さに関するアクティビティについては、もちろん命綱でつながれているとはいえ、恐怖心との闘いになります。その際にチームメンバー同士で励ましあい、叱咤激励することでタスクの完成を目指しました。

アクティビティはどれもチャレンジングで、体力的にも苦しいものが多かったのですが、私のチームはメンバー同士の関係が非常に良好で、全ての活動に楽しく取り組むことができました。関係が良好であるため、レビューなどの意見交換時お互いが正直に意見を述べ合うことができ、全体を通して非常に意味のあるアクティビティとなりました。

また、私たちのグループでは、活動を通じてリーダーシップとチームについて一つの課題にたどり着くことができました。それは、よいチームメンバーになることはよいチームリーダーになることと同じくらい難しい、ということです。

私のクラスメートは優秀な方ばかりであり、誰もがリーダーシップのスキルを持っています。逆にそのことが災いして、課題に取り組む際に個人で考えてしまい、グループとして合意に達する前に行動に移してしまうことがよくありました。このことはレビューでも幾度となく議論され、問題視されました。与えられた課題をただ解決するのではなく、グループとしていかに効率的に取り組むか。そのためにはリーダーの指示に従い、グループとして合意の上、全員が情報を共有してから行動に移そう、と何度も試みました。しかし、実際に課題を目の前にすると、合意や情報共有の前にどうしても行動に移してしまうことが続きました。特にもともとリーダー資質の強い人以外がリーダーであった場合、その傾向が顕著に見られました。

私のグループにおけるレビューは、最終的に以下のように締めくくられました。実際のビジネスにおいて、最もリーダーにふさわしい人がリーダーであるとは限りません。その場合でも、リーダーの役割を非公式に奪うことや、組織上と実質のリーダーが異なることはいい結果をもたらしません。チームメンバーとしてどのようにリーダーをサポートし、結果としてチームを成功に導くことを考える必要がある。そのため、よいチームメンバーになることは、よいチームリーダーになることと同じくらい難しいことである。

私のクラスメートの多くは、近い将来チームをリードする立場に立つと思います。私もそのような立場から業務に取り組むために、留学して国際的な環境でビジネスを学んでいます。また、MBAコースはそもそもリーダー育成のためのコースでもあります。そのような環境の中、リーダーシップ育成トレーニングを通じて改めてチームとリーダーの大切さを考えることができました。



左：ポールの上にある小さい板の上に最大4人が同時に立つ、というトレーニングです。
右：壁のぼりです。体力勝負ですが時間をかければたいてい登れます。



左：私のグループメンバーです。非常に良好な関係で本気の話し合いができました。
右：限られた道具を使用して火をおこし、ゆでたまごとココアを作るというトレーニングです。

<コンサルティングトレーニング>

世界でも有数のコンサルティング会社であるデロイトの社員を講師に迎え、一週間を通してコンサルティングのトレーニングを行いました。このトレーニングは人数制限があるだけでなく、大学の講義とは切り離されているため、卒業時の単位にはカウントされません。そのため、成績による仕分けに加え、トレーニングを本当に受けた人だけが集まり、非常に密度の濃い内容となりました。また、バーミンガム大学シンガポール校からこのトレーニングのために渡英した学生もあり、それだけレベルの高いトレーニングであることを実感しました。

内容としては、コンサルティングのシミュレーションでした。6人ずつのグループに分かれ、月曜日にクライアントと初回ミーティングを行い、ミーティングを重ねながら毎日の課題をクリアし、最終的に金曜日にクライアントに対してビジネスの提案をプレゼンテーションとビジネスレポートの両方で行いました。おもしろいことに、クライアントは実際のデロイト社の顧客であり、ビジネスの状況もシミュレーションではなく現実のものであるということです。最終的なプレゼンテーションも、実際にビジネスを行なっている顧客に対して行いました。

顧客となったのはイギリス国内に4つのビール工場と、EU圏内に1000を超えるパブのフランチャイズを経営するアルコール関連会社でした。ビジネスの世界展開を狙っており、競売にてオランダ・ナイジェリア・アメリカ・スコットランドのアルコール製品製造工場とブランドを今年初めに買収したところです。今後の事業展開のために、現在の会社の方針や経済的な状況、さらには世界経済やアルコール市場の動向も視野に入れ、買収した会社をどのように展開していくのが適切か考える、という課題でした。

内容が「生きた」課題であることもあり、授業やレクチャーとは全く異なった視点で取り組むことができ、非常に内容のあるグループワークを行うことができました。特に全員が参加希望者であるため、話し合いへの参加の意志が非常に高く、密度のある学習ができました。さらに、私のグループには講師会社であるデロイト出身の学生がおり、元コンサルタントとしての立場からの意見も非常に参考になりました。

私のグループの最終的な提案は、4つのブランドのうち一つに注力し、2つは維持、残りの一つは売却先を模索するという内容になりました。私はIT技術者の立場から、買収後のIT基盤の統合の計画を提案し、説明しました。統合の必要性についてデータを交えて説明し、今後の計画と予算やリスクについての説明が終わったあと、顧客のCEOが「Thank you」と言ってくれたことが非常に印象に残りました。

このトレーニングでは、実際のビジネスシーンにおける課題を用い、実際のコンサルタント会社の方やクライアントの方と議論を重ね、自分たちの考えをまとめるというプロセスを辿ることができました。講義で学んだセオリーを試す最適な機会であり、セオリーだけでは通用しないことを身をもって感じる事ができました。



前の4名がデロイトからの講師。私は後方の真ん中より少し右にいます。

<ウェスト・ブルミッジ ロータリークラブ訪問>

バーミンガムから電車で3駅ほどの街「ウェスト・ブルミッジ」にあるウェスト・ブルミッジ ロータリークラブを訪問し、スピーチを行いました。メンバー数は12名と少ないものの、1060地区で最も歴史のあるクラブの一つとのことでした。ここでは、街中にあるホテルを会場として使用しているのですが、そのホテルには毎週のように百人単位で日本人が訪れるそうです。ホテルの方の話では、ロンドンからマンチェスターやリバプールを観光する際に、距離的に適当であることもあってツアーの中に組み込まれているとのことでした。実際に私がスピーチをしている最中にも、アジア人団体客を乗せたバスが到着していました。

スピーチ後には、イギリスでの就業についての話になりました。EU圏全体で景気が悪く、特にイギリスでは外国人に対する就労ビザの条件が厳しくなっています。それにより短期的にはイギリスの失業率を押し上げるのかもしれないが、それによって外国人がイギリスでビジネスを展開する機会を失っているのではないかと。結果として、長期的にはイギリスの経済力に悪影響を与えるのではないかと、とのことでした。日本においても、今後は人口減少が加速することもあり、海外からの労働力に頼らざるを得ない状況になると考えられます。その場合においても、長期的な目線で事象を捉えることが大切だと教わりました。



<北部ウェールズ旅行>

奨学金コーディネーターであるポール様ご夫妻の招待により、イギリス国内小旅行に行つて参りました。行き先は北部ウェールズで、三泊四日の旅程は全て天候にも恵まれ、新緑のウェールズを楽しむことができました。

宿泊した施設は、「ランドマーケットラスト」という機関が運営するちょっと変わったタイプの宿でした。この機関では、古いお城や教会などの施設を修復し、宿泊施設として使用できるように改修して、人々に提供するという事業を行なっています。この機関が持つ宿泊施設には、実際にお城として使用されていた建物などもあるとのこと。今回宿泊した施設は、農場の中にある17世紀に建てられた建物で、それを改修して電機なども使用可能になっています。暖炉や煙突などはそのまま残されており、使用可能な状態に保たれていました。食事の提供はない代わりにキッチンや調理設備が備え付けられており、自分たちで食材を持ち込んで調理しました。

また、ここはベッドや部屋ではなく建物単位で予約するため、一人分のベッドが余っているとのことでした。ポール様ご夫妻は、私にクラスメートを誰でも招待してかまわないとおっしゃってください、私はグループワーク等で幾度と無く助けられた、インド人のアディと一緒に来てもらいました。

ウェールズ北部は、外国人の観光客はほとんどいません。外国人にとっては、他にも魅力のある観光地がいくらかもあるので、田舎と自然がテーマのウェールズ北部にはなかなか足が伸びないのだと思います。私ももしまたイギリスを訪れる機会があったとしても、ウェールズにまで再び行くことはなかなか難しいとおもいます。とはいえ、奥深い歴史と広大な自然に囲まれた非常に魅力的な地域であり、ポール様ご夫妻が提供して下さった東の間の週末を楽しむことができました。



右がポール様ご夫妻、私の前にいるのがクラスメートのアディ

5月は合宿や週単位のトレーニングが続いたため、非常に早く過ぎてしまったように感じます。それでもクラスメートたちとのグループワークなど、非常に実りのある時間を過ごすことができている。今後は大学からの特別な予定はなく、修士論文にシフトしていくことになります。

修士論文が終われば、いよいよ私の留学も修了となります。実際の修士論文の作成にあたっては、計画をしっかりと立てればイギリスに滞在して仕上げる必要はないとのこと。クラスメートでも、6月上旬には自分の国へ帰国して、自国で論文を仕上げるといった計画の方が少なからずいます。私はこれから担当教官と話をすることになるのですが、帰国の時期も含めて改めて確認したいと考えています。今まで多くの新たな出会いがあった留學生活ですが、これから数か月は別れの機会が多くなります。ここで築き上げた学友たちとのつながりをより長く確かなものにするために、少なくなってきた留學生活を楽しまたいと考えています。

以上